

オノマトペ・音象徴の研究史

秋田 喜美
JSPS/UT

•本発表は、同題の準備中論文に基づきます。

1. はじめに

- 本発表：
オノマトペ・音象徴研究の課題・成果・展望を概観
- オノマトペ・音象徴の研究史：
 - 何度も基礎を問い直す歴史
 - 「壁」を取り払っていく歴史
- 本発表の目標：
 - 余計な障壁のない研究分野の土台造り
 - その上に築かれるべき研究の見取図描き

1. はじめに

- オノマトペ・音象徴研究の発端：
 - 言語記号の恣意性の反例 (de Saussure 1916)
 - プラトンの *Cratylus*、空海の真言宗、音義説
 - 実質的な幕開け：1920s
- 重要書籍：
 - 国外：Hinton et al. 1994, Voeltz & Kilian-Hatz 2001
 - 国内：Hamano 1998, 寛・田守1993, 田守・スコウラップ1999

1. はじめに

- 従来：
 - 音象徴研究 c 心理学 → 一般認知科学
 - オノマトペ c 国語学 → 一般言語理論
 - 各分野の閉鎖性 → 分野間交流や学際的
研究の開始
 - 特殊性への注目
- 近年：
 - 非特殊性・一般性も

1. はじめに

- 構成：
 - §2: 音象徴研究
 - §3: オノマトペ研究
 - §4: 日本語オノマトペ研究
 - §5: まとめ+応用研究

2. 音象徴

2. 音象徴

- 言語音と意味(imagery)の間に何らかの有縁的(motivated)・非恣意的な関係が見られる現象

※ 音象徴の「象徴」≠ 記号論の恣意的symbol

2. 音象徴

- 用語：
 - sound symbolism (Jespersen 1922)
 - phonetic symbolism (Sapir 1929)
 - phonosymbolism (語源学など)
 - phonesthesia (音象徴素研究)
 - phonetic iconicity (音声的類像性)
 - phonosemantics (音韻意味論(分野・考え方))

2. 音象徴

- 研究数の推移 (Akita 2005-2010):



2. 音象徴

- 普遍性の探究：
 - 2.1: 基礎研究
 - 2.2: 意味 (何が象徴されるのか)
 - 2.3: 音 (何が象徴するのか)
 - 2.4: 両者のマッピングの仕組み

9

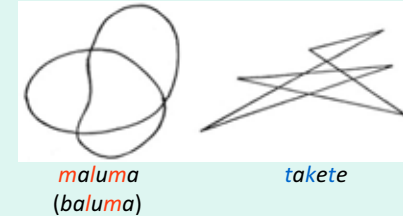
2.1. 基礎研究

- 手法：
 - 新奇語／非母語単語 (反義語, 直示語) をもちいた実験 (語彙選択課題, SD法)
 - コーパス調査 (Bloomfield 1909-1910, Jespersen 1922, Ultan 1978)

10

2.1. 基礎研究

- Köhler 1929/1949:



- Sapir 1929:
mal > *mil*

11

2.1. 基礎研究

- 実在語の音象徴：
 - yawaraka-i* vs. *kata-i*
 - large* vs. *teeny*
 - gozira*, *gengogaku*, ...

12

2.1. 基礎研究

- 主要実験結果 (Taylor 1963, Atzet & Gerard 1965改):

	言語	結論
Newman (1933)	英語	○
Tsuru & Fries (1933)	英語・日本語	○
Allport (1935)	英語・ハンガリー語	○
Rich (1953)	英語・日本語・ポーランド語	○
Brown, Black, & Horowitz (1955)	英語・日本語・中国語・チェコ語	○
Maltzman, Morrisett, & Brooks (1956)	英語・日本語・クロアチア語	×
Brackbill & Little (1957)	英語・日本語・中国語・ヘブライ語	×
Brown & Nuttall (1959)	英語・中国語・ヒンディー語	○
Atzet & Gerard (1965)	ナヴァホ語	×
Taylor & Taylor (1962)	英語・日本語・韓国語・タミル語	○
Slobin (1967)	英語・タイ語・カンナダ語・ヨルバ語	○
Tarte & Barritt (1971)	英語	○

2.2. 意味尺度の問題

- 大きさ (size/magnitude) の母音象徴：
 - 口腔内の空間との直接的関係ゆえ最も基本的(?)
[ʌ], [o] > [a], [u] > [æ] > [ɛ] > [e] > [i]
(Newman 1933)
 - Bahnar語 (Diffloth 1994), 韓国語 (Kim 1977)
例: 빈굴 [i] > 번굴 [ɛ] (回転)
 - 強さの音象徴? (Ohala 1997)

14

2.2. 意味尺度の問題

- より副次的(?)な音象徴の意味尺度：
 - 形状, 明るさ, 硬さ, 暖かさ, 快さ, etc.
- 実際に象徴されるものは、言語的に取り出されるこれらの「意味」よりも抽象的なはず (Kantartzis 2011)
 - 恣意性の介入：言語間のばらつき
 - 音象徴における複数の抽象化レベル

15

2.3. 音象徴の単位の問題

- 音象徴の「音」とは？
 - 周波数 (例: F_0 の f_0)
 - 音声素性 (例: 阻害音)
 - 音声 (例: [ʃ])
 - 音素 (例: /s/)
 - 音素連続 (例: sl-)
 - 音節・モーラ (例: し)



16

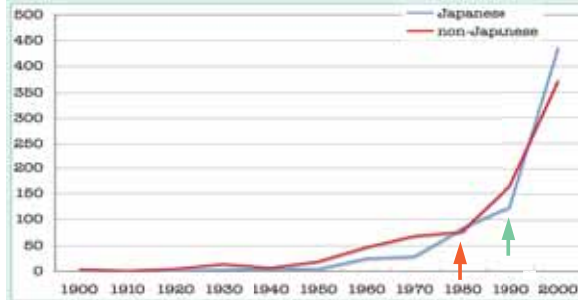
2.3. 音象徴の単位の問題

- 周波数信号仮説 (the frequency code hypothesis) (Ohala 1984, 1994):
 - 高い声調・ F_2 の高い母音 (特に [i]) ・周波数の高い子音 = 高音・小・鋭・速
 - 低い声調・ F_2 の低い母音 (特に [u]) ・周波数の低い子音 = 低音・大・柔・重・遅
 - 一般性
- 動物行動学的実在性

17

3. オノマトペ

- 研究数の推移 (日本語 vs. その他)



3. オノマトペ

- 通言語的な根本的問題:

- 3.1: 意味分類
- 3.2: 定義
- 3.3: 範疇

※ 議論されてきたテーマには言語間で相当の重なりがあるにも関わらず、例えば日本語オノマトペ研究者は日本語ばかりみてきた。

28

3.1. 意味分類の問題

- 三分法 (Martin 1975):
 - 擬音語 (phonomime): 聴 (にやー、がちゃん)
 - 擬態語 (phenomime): 視・触 (きらり、ざらっ)
 - 擬情語 (psychomime): 痛・味・嗅・心 (どきっ、くよくよ)
- 二分法 (擬音語 vs. 擬態語) → 最も一般的
- 五分法 (金田一1978):
 - 擬音語 → {擬声語 (+anim) vs. 擬音語 (-anim)}
 - 擬態語 → {擬容語 (+anim) vs. 擬態語 (-anim)}

29

3.1. 意味分類の問題

- 語彙的類像性階層 (Akita 2009):
臨時オノマトペ (どどーん)
 - > 擬声語 (ぎゃー)
 - > 擬音語 (びゅんびゅん)
 - > 擬態語 (ぶらり)
 - > 擬情語 (がっかり)
 - > 一般語 (りんご)
- 各範疇は連続的と考えるのが通例
例: ばたばた (音~態)
そわそわ (態~情)

30

3.2. 定義の問題

- 最大の問題 (Johnson 1976; Hamano 1998, 田守・スコウラップ1999):
 - 母語話者のもつはっきりした意識
 - 全オノマトペに共通する具体的特性の不在
 - 通言語的多様性

→ 6種の試み

31

3.2. 定義の問題

- ① 形態・音韻・音素配列 (Fortune 1962, Samarin 1971, Klamer 2002):
 - 重複形 (例: こんこん、ぶかぶか)
 - 音節構造 (例: *túkúf* (Hausa: 非常に老いた))
 - 声調パターン (例: *búzuu-bùzuu* (Hausa: 乱れた))
 - 日本語・Bulu語の語頭[p] (例: ぴかっ)

32

3.2. 定義の問題

- ② 音象徴・類像性:
 - 音象徴は一般語にもある
 - 音象徴性の低いオノマトペがある (例: ちょっくら、ずっ (と))
 - 言語により音象徴の軸が異なる:

日本語: *koro* vs. *goro* (cf. *koro* ?vs. *kara*)
Semai語: *gr̥i:p* (小・もろい), *gr̥ū:p* (大・やや柔),
gr̥á:p (大・硬), *gr̥ɔ:p* (大・かりかり)

33

3.2. 定義の問題

- ③ 意味:
 - vivid (Doke 1935)
→ 客観性の欠如
 - 感情・イメージ次元 (affecto-imagistic dimension) (Kita 1997)
→ 二次元は連続的のよう

34

3.2. 定義の問題

- ④ 神経科学 (Osakaらの一連の研究):
笑い・歩行・痛み・視線のオノマトペがそれらの実経験と同じ脳部位を賦活

35

3.2. 定義の問題

⑤ 談話語用論：

- 口語性
- 幼児性？
- 文化人類学的重要性（挨拶、儀式、歌、仕事、民族意識）(Nuckolls 1996, Dingemanse 2010)
- 文学・漫画
- 意味タイプによる違い (Baba 2003)

36

3.2. 定義の問題

⑥ 統語：

- Hausa語などではオノマトペは基本的な構文にしか生起できない：
*否定文, *疑問文, *命令文
(Newman 1968, Diffloth 1972)
- 言語内（例：Hausa語でも程度副詞的オノマトペは自由）・言語間で異なる (§3.3)

37

3.2. 定義の問題

• 解決策：

- オノマトペ範疇=プロトタイプ範疇 (Childs 1994, Akita 2009)
- ①～⑥の形式的・機能的特殊性=典型条件
- 範疇周辺の現象：
 - オノマトペの一般語化（例：そっくり, どんどん）
 - 一般語のオノマトペ化（例：しみじみく染む, ほっそりく細い, *keni < kena* (Sesotho: 入る) (Kunene 2001))

38

3.2. 定義の問題

• 結論：

- オノマトペの通言語的定義：
典型的に特殊な形式的・機能的特性を持つ語
- 特性の詳細は言語個別的に決定される
(Newman 1968, Johnson 1976)

39

3.3. 範疇の問題

- オノマトペの語彙範疇の通言語的多様性：
 - 特定の範疇：Semai語, Waleyta語, Yir-Yoront語
 - 複数の範疇：日本語, Ewe語, Sesotho語
- 通言語的に“aloof”な副詞・間投詞が主流だが：
 - Zulu語：動詞的 (Voeltz 1971)
 - ソマリア語：名詞的 (Dhoore & Tosco 1998)
 - 広東語：形容詞的, etc. (Bodomo 2006)

40

3.3. 範疇の問題

• 日本語：

- 副詞的（ぬるぬる滑る）
- 動詞的（ぬるぬるする）
- 形容詞的（ぬるぬるだ）
- 名詞的（ぬるぬるが取れない）

41

3.3. 範疇の問題

- これらの分布に規則性はあるか？
通言語的一般化は可能か？



- 類像性仮説
- 頻度仮説

42

3.3. 範疇の問題

① 類像性仮説 (Akita 2009):

- 類像性の高いオノマトペほど節の周辺（付加詞）や外側（間投詞）に実現され易い。
- 類像性の低いオノマトペほど主節の中核（述語やその項）に実現され易い。

43

3.3. 範疇の問題

• 日本語：

- a. 声/音：
述語 付加詞
子供が {*けらけらし / けらけら笑っ} ていた。
- b. 態：
子供が {*てくてくし / てくてく歩い} ていた。
子供が {ぶらぶらし / ぶらぶら歩い} ていた。
- c. 情：
子供が {どきどきし / ?どきどき緊張し} ていた。

44

3.3. 範疇の問題

• 英語 :

a. 臨時 :

A wristwatch {kerplopped/fell kerplop} into the water.

b. 音 :

A girl {plopped/(?)fell;plop} into the water.

c. 態 (?) :

Stars {twinkled/*shone;twinkle} in the sky.

45

3.3. 範疇の問題

② 頻度仮説 (Dingemanse 2010):

- 高頻度のオノマトペは、形態統語的に節の他の部分と統合され易い。
- 低頻度のオノマトペは、形態統語的に節の他の部分と統合され難い。

(cf. Haspelmath 2008)

46

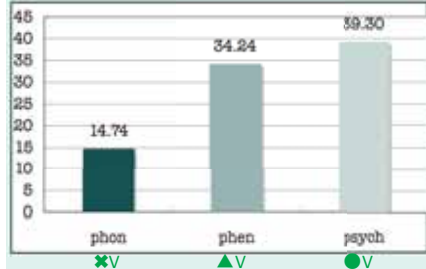
3.3. 範疇の問題

- See Dingemanse 2010: 77 for relevant data in Siwu

47

3.3. 範疇の問題

• 日本語オノマトペによる頻度仮説の検証 :



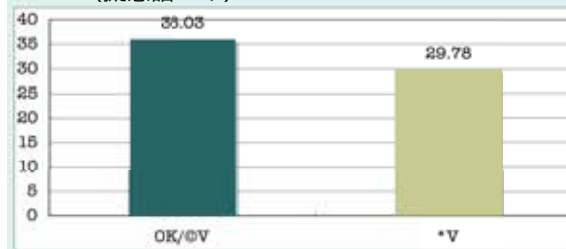
Takehi et al. 1996
よりランダムに
50語ずつ (Akita
2009: App. C);
BCCWJ 2010;
fq > 500を除く

(F (2, 135) = 3.79, p < .05)

48

3.3. 範疇の問題

• 日本語オノマトペによる頻度仮説の検証 (擬態語のみ) :



(t (44) = .46, p = .65 (n.s.))

49

3.3. 範疇の問題

- 形態統語的統合 :
 - 形態的拘束性と正の相関
 - 表現性 (expressiveness) と負の相関 (→ 強調形態 : expressive morphology) (Dingemanse 2010)



- 類像性仮説と補完的。
- 語用論的展開も。

50

4. 日本語のオノマトペ

51

4. 日本語のオノマトペ

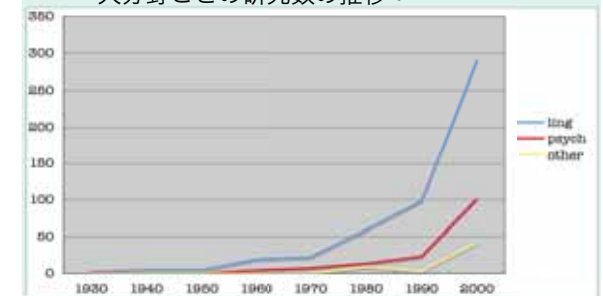
• 言語研究の中心となってきた言語の多く = オノマトペに富まない言語

→ 日本語研究 = 牽引役 ?

52

4. 日本語のオノマトペ

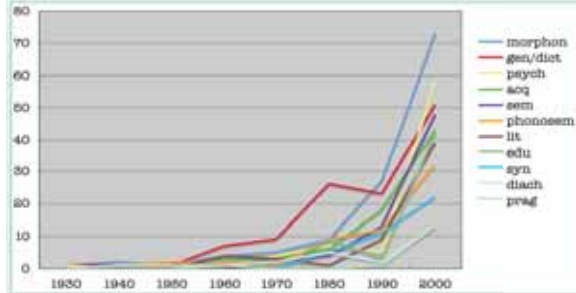
• 大分野ごとの研究数の推移 :



53

4. 日本語のオノマトペ

- 下位分野ごとの研究数の推移：



55

4. 日本語のオノマトペ

- 本節：
上で触れられなかった特記事項のまとめ：
- 4.1: 研究の流れ
- 4.2: 事例研究：「と」（略）

55

4.1. 記述から理論へ

- 主に20世紀：
 - 国語学におけるオノマトペの特殊性の記述（小林1935, 泉1976, 玉村1984, 大坪1989）
 - 辞書の編纂（浅野1978, 阿刀田・星野1995, Kakehi et al. 1996, 山口2003）
 - 通時的研究（山口2002, 小野2009）

56

4.1. 記述から理論へ

- 今世紀の再加熱の火付役：
 - Hamano 1986/1998:
オノマトペの音象徴体系+音韻論
 - Kita 1997:
オノマトペの意味次元の独立性
 - Tsujimura 2001, 2005 → Kageyama 2007;
Toratani 2005, Akita 2009
- 理論言語学のテーマに

57

4.1. 記述から理論へ

- その他：
 - 移動表現の類型論におけるオノマトペ（Wienold 1995, Ohara 2002, Slobin 2004, Ibarretxe-Antuñano 2006, 秋田他2010）
 - 認知意味論（メトニミー、共感覚メタファー）（山梨1988, 武藤2003, 呂2006, 三上2006）

58

5. おわりに

59

5. おわりに

- オノマトペ・音象徴研究：
基本事項が繰り返し問われつつも決定打には至らず。
- 本格化して約1世紀が経った今必要なもの：
 - 音象徴：
有意義な音・意味レベルおよびマッピング能力の追究
 - オノマトペ：
一般理論言語学的・通言語学的視点の追究
日本語研究の成果の輸出
 - 両者の間の壁の破壊

60

5. おわりに

- 心理学・言語学の周辺テーマから学際的テーマへ
- 応用可能性の探究：
 - ① L2習得 (Iwasaki et al. 2007), 日本語教育 (三上2007), 養護教育 (有働・高野2007), スポーツ教授 (藤野2008)
 - ② マーケティング・ネーミング (Klink 2000, Yorkston & Menon 2004, Shrum & Lowrey 2007)
 - ③ 機械工学 (坂本プロジェクト他)

61

5. おわりに

- 革新の21世紀も始まってまだ十年余り：
 - 同じ問題の解き直しが一段落
 - 学際的連携の素地が整いつつある
 - 研究熱の高まり
- **大きなステップアップのタイミング！！**

62

ありがとうございました！



<http://sachateatro.blogspot.com/>